ＮＰＯ法人 やまと自然と虫の会と、環境省大台ヶ原自然再生事業昆虫調査とのかかわり

伊藤 ふくお
（ＮＰＯ法人やまと自然と虫の会）

橿原市昆虫館友の会組織の中から、新たに「特定非営利活動法人やまと自然と虫の会」を立ち上げました。設立の主な目的は、生きものに対する正しい知識と不思議さを、体験から学ぶことを通じて、自然と昆虫の科学の発展と普及にとり組み、次代を担う子どもたちを中心に自然環境の大切さを伝え、幼児教育などに携わる先生などに対しては、学習に役立つ自然情報を提供するための事業を行い、自然の中で心豊かな暮らしや生きものとふれあう、やさしい地域作りに寄与することです。

「やまと自然と虫の会」の事業は、

1. 自然科学の啓蒙と普及
2. 自然教育・環境教育指導者支援
3. 自然観察の指導者やボランティアの養成
4. 自然科学に関する生涯学習
5. 調査研究
6. 自然関連の出版
7. 公的施設の管理

ピットホールトラップの設置（2005年5月30日）

8.　自然関連の物品販売

設立は、2005年６月10日で、まだまだ若い特定非営利活動法人です。設立以前からの準備段階で、2. 自然教育・環境教育指導者支援事業と、5. 調査研究事業についてはすでに活動を始めていました。その調査研究事業では、奈良県吉野郡上北山村に位置する大台ヶ原において環境省が進めている、大台ヶ原自然再生事業の一環である、昆虫調査をお引き受けすることになり、2005年５月より調査を開始しました。その内容は、大台ヶ原に設定された自然再生事業対象区域内で、既に設定し調査を継続している、森林環境や下層植生の異なった環境において、シカが入れない柵をもうけた内部と、シカが立ち入ることのできる柵外合計14か所にそれぞれ、30個のピットホールトラップ。１個の追突板トラップ（サンケイトラップ）を設置。それを中１日放置し２日目に回収する方法で、５月～10月まで６か月間、月１回の調査を６回行いました。１日で可能な、トラップの設置や回収は、２～３か所が限度で、７か所の調査に要する日にちは、約１週間を要しました。台風などの来襲で、危うい時もありましたが、何とか10月まで調査を完了することができました。

40数年前、三重県側の大杉峡谷を登って大台ヶ原を訪れたことのある私の記憶は、へとへとになってたどり着いた日出ヶ岳で、運動靴でザックも持たずに歩いている人を見かけて、何だこの山はと訝しく思った記憶の方が鮮烈に残っていますが、確かにコケだらけの暗い森林だった印象も微かに残っています。その頃、大台ヶ原ドライブウエイが開通したと聞いています。気候の変動、ハイカーの増加や、車の排気ガスなど、環境が変化したのにはいくつかの要因が考えられますが、ニホンジカの増加が最も大きな要因ではないかと現在考えられています。ニホンジカが増加している原因もいくつか考えられます。大台ヶ原には昔、オオカミが棲みシカやカモシカなどを捕食していたため、生息数が制限され良好な森林が維持されていたと言う学者もいます。オオカミがいなくなり、周りの森林がどんどんスギやヒノキの人工林に変わり、シカなどの餌がなくなり森林植生豊かな大台ヶ原へ集まってきたと言う人もいます。確かに、大台ヶ原に限らず、私の工房のある宇陀市でも、数年前よりニホンジカを見かける機会が増えました。そのシカが、大台ヶ原でどの程度森林の下層植生に影響を及ぼしているのか、興味のあるところです。どの程度データ蓄積が必要なのかは判りませんが、私たちが調査集積したデータが、良好な森林維持と、私たちを含めた動物との共生を探る糸口になると信じ、今その研究の最前線で調査できることを、やまと自然と虫の会のメンバーは、誇りに思っています。

サンケイトラップの設置（2005 年 5 月 30 日）